

## 「類」を導入する『萬葉集』左注の問題

村 本 春 香

### 一、はじめに

『萬葉集』には、歌の「類」に言及する左注がある。これらは、「類」に対する態度は異なるものの、巻の方針に反するように歌を持ち込むという共通項を持つ。整然とした歌の並びをまるで壊すかのようなだが、そこにはどのような意味があるのだろうか。

### 二、「類」の枠組み

左注が歌のジャンルを「類」とするのは、以下のような場合である。

黄葉に置く白露の色葉にも出でじと念へば事の繁けく

(卷十・二三〇七)

雨零れば滝つ山川石に触れ君が摧けむ情は持たじ

(卷十・二三〇八)

右一首、不<sup>レ</sup>類「秋歌」而以<sup>レ</sup>和載<sup>レ</sup>之也。

卷十は季節ごとに歌を分類しており、この歌は「秋相聞」に載せられている。二三〇八番歌左注は、歌の配列基準を「類」と

して意識し、それに該当しないとの判断を示す。それは、秋を思わせるものが詠み込まれていないからである。しかし、「和」であることを理由に、この歌を載せているのは、左注の根底に、同じ時に詠まれた歌を切り離すことはできないとの考えがあるからだろう。二三〇七番歌は、これだけで詠むと、周囲の人がうるさくて、相手を気遣い、思うように逢瀬がかなわないことを嘆いているように見える。しかし、二三〇八番歌が「和」されることで、人に知られまいという苦心を述べることが、逢いに来ない言い訳として非難されることになる。二三〇七番歌の文脈を正しく固定するためには、二三〇八番歌も併せて載せなければならぬと考えるのだろう。

同様の見方は、以下の例からも窺える。

闇の夜は辛苦しき物を何時しかと吾が待つ月も早も照らぬ

(卷七・一二七四)

か 朝霜の消やすき命誰が為に千歳もがもと吾が念はなくに

(卷七・一二七五)

右一首者、不<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>譬喻歌類<sup>一</sup>也。但、闇夜歌人所心之故並作<sup>二</sup>此歌<sup>一</sup>。因以<sup>二</sup>此歌<sup>一</sup>載<sup>二</sup>於此次<sup>一</sup>。

一三七五番歌は、譬喩歌の部に載せられているものの、そのような歌には見えない。一三七四番歌が、恋しい相手を「月」に喩えているのとは対照的である。しかし、この二首は作者が共通しているの、並べて載せるのだとする。やはり、左注にとつては、同じ思いを詠む歌は「類」を超えて載せるべきなのである。ここでも、一三七四番歌の、恋しい相手を待ち望む苦しみの原因は相手のつれなさにあったことが、一三七五番歌によって明らかにされている。他の誰でもない、ただひとりのために、千年も生き存えたいとまで思っているのに、それでも逢瀬がかなわない苦しさは「闇夜」だったことになる。その思いを正しく理解するためには、やはり一三七五番歌は不可欠であろう。

以上の二例とも、歌を配列する分類基準が「類」とされていた。その基準に違反するような歌が左注によって併せられることで、分類項目に合致する歌からだけでは見えてこなかった意図が具体的に提示される。この左注は、分類基準を超えたところに、実は歌の意義があることをあらわし出すこととなっている。

なぜ、「類」によって歌を採り上げるだけでは、その歌の歌意が曖昧になってしまうかという点、「類」とは歌意を超えたところに成立する側面があるからだと考えられる。以下に挙げる例は、そのことによって、「類」の世界が創られていくものである。

右件歌等、雖<sup>レ</sup>不<sup>二</sup>挽<sup>一</sup> 柩之時所<sup>レ</sup>作、准<sup>二</sup>擬歌意<sup>一</sup>。故以載<sup>二</sup>于挽歌類<sup>一</sup>焉。

卷二挽歌部冒頭歌群に付されたこの左注は、挽歌を「挽<sup>レ</sup>柩」

の際の歌だと敢えて規定した上で、その分類基準からは外れる歌を、「歌意」によって載せたのだとわっている。挽歌とは、「文選」の部立に倣ったものとされるが、「文選」の挽歌部にも、「挽<sup>レ</sup>柩」に関わらない詩が含まれている。しかし、有間皇子の歌のように、その死よりも前に詠まれ、しかも旅の無事を祈るようなものまでもが含まれるとは考え難い。そこで、「歌意」によって、という左注が付されたのだろう。本来ならば挽歌に含まれないようなものを、その近似性によって纏め上げてしまうものが「挽歌類」として捉えられている。

さらに、「挽<sup>レ</sup>柩」に関わらない、それに類似する歌が載せられるのはこの箇所に限らない。例えば、人麻呂が自らの死に際して詠んだ二三番歌も葬送とは関わらないが、題詞や左注では何もことわらない。それは、一四五番歌左注が、挽歌という部立の定義そのものを示しているからに他ならない。「類」によって、原義とも「文選」とも異なる挽歌の部が成立していることをあらわしているのが、この左注であるといえよう。

このようなことが可能になったのは、その定義とは完全に一致せず、その裾野に広がる周辺が「類」だったからであろう。先の二例と異なり、何が「類」なのか、その境界は明確ではないが、悲哀の思いが、「類」によって積極的に掬い取られている。「類」という言葉が抱える曖昧さは、以下に挙げるような場合、どのように機能するのだろうか。三二一番歌に付された左注はただ「類」とのみ述べ、その内実には言及しない。

右一首、高橋連虫麻呂之歌中出焉。以<sup>レ</sup>類載<sup>レ</sup>此。

まずは、「右一首」の範囲を確認しておく。この歌のみを指す

との説もあるが、「詠」不尽山「歌」の題詞をもつ三一九〇三二一首歌の三首のことだと考えるべきだろう。前者では、題詞に作者名を記さない長反歌に、なぜ虫麻呂の短歌を併せるような構成になっているのか説明がつかない。この歌の前には赤人の不尽山歌が、そしてこの後ろにも、伊予温泉に赴いた際の歌、神岳に登った歌と赤人の歌が二歌群続く。赤人歌群のなかに、虫麻呂の歌が挿入されるかたちになることへの注記と考えた方が自然だろう。巻三雜歌部の配列基準ということではないが、この歌の前後に赤人の歌が集められていることを、「類」という基準を持ち込むことで照らし出している。

この時に左注がただ「類」とのみ述べるのは、歌からも題詞からも、双方が不尽山を詠んでいることは言うまでもなく、明示の必要を感じなかったからだとい応は考えられる。

しかし、果たしてそれだけだろうか。両歌群は、不尽山のあらわし方という点でも一致をみる。虫麻呂の長反歌に共通する「天雲もい行きはばかり」は、赤人の長歌三一七番歌で「白雲もい行きはばかり」と詠まれる。また、赤人が「時じくそ雪は降りける」と詠んだ雪を、虫麻呂は第一反歌で「六月の十五日に消ぬればその夜降りけり」と詠んでおり、共に季節外れの雪と対峙した歌になっている。対象の一致のみならず、実は不尽山を把握する見方までもが、左注には「類」として意識されていたのではないだろうか。具体的に何を「類」とするのか明言したい、歌の表現にまで踏み込んでいることのあらわれが、ただ「類」とのみ述べることだったのだろう。

### 三、巻六の「類」

巻六には前半部に三例の「類」に言及する左注がある。何が「類」とされているのかは曖昧だが、同時にこの左注が作歌時期を不明だと述べていることが注目される。巻六は歌を年次別に並べる巻であるが、それとは矛盾するかのよう、歌を載せる根拠を「類」に見出だしていることになろう。左注は、時間軸に沿ったかたちでは決して繋がることのない歌と歌とを繋げる論理として「類」を導入することで何と対峙しているのか。

#### 五年戊辰辛三于難波宮一時作歌四首

大王の界ひ賜ふと山守居あ守ると云ふ山に入らずは止まじ

(巻六・九五〇)

見渡せば近き物から石隠りかがよふ珠を取らずは已まじ

(巻六・九五二)

韓衣服櫛の里の婦まつに玉をし付けむ好き人もがも

(巻六・九五二)

さを牡鹿の鳴くなる山を越え去かむ日だにや君がはたあはざらむ

(巻六・九五三)

右、笠朝臣金村之歌中出也。或云、車持朝臣千年作之也。

#### 膳王歌一首

朝には海辺にあさりし暮去れば倭へ越ゆる膺しともしも

(巻六・九五四)

右、作歌之年不審也。但、以三歌類「便載」此次。九五四番歌左注は、作歌の年がわからないので、金村（もしく

は千年」の歌の「類」として載せたとする。同じ難波の地での作だということだろうか。しかし、前節の例に鑑みると、「類」は歌の細部にまで踏み込むものではないか。膳王が同行した可能性のある難波行幸関連歌は、他に神亀二年のものが巻六・九二八―九三四番歌に見える。長歌で宮の造営を寿ぐ神亀二年の作と並べるのではなく、この位置に膳王の歌が載せられているのは、前四首との関連が認められているからだろう。

九五四番歌は、「大和へ越ゆる雁」が詠まれている。『評釈』（窪田）が、「歌の上の場所は、倭に近い海辺であるから、難波であり、行幸の供奉といふことが自然であらう」と述べるように、この歌は、難波の地を思わせる。大和へ帰ることのできる雁を目にすることで、それがかなわない自らの現状が呼び起こされているのがこの歌である。その根底には、当然、大和で待つ人と違いたいとの思いがあらう。そして、この雁との対比の構図は、九五三番歌と共通する。九五三番歌の妻を求めて鳴く「さ壮鹿」は、妻との出逢いを果たすかもしれない。それなのに、恋心がかきたてられる筈の日であっても、「君」は逢おうとしないという。ここには「さ壮鹿」と自身の対比がある。左注は、これを「類」として、九五四番歌を繋ぎ合わせたのではないだろうか。

その結果、難波の地を窺わせるような表現のなかった前四首も、一方に、大和への思いが底流しているかのように、文脈が掘り起こされていくのではないか。恋のやりとりを交わす前四首に望郷の思いが関わるとは一見、見えない。ところが、九五四番歌と併せると、やみがたい大和への思いがあるために、九

五二番歌では奈良の里が選ばれてしまっているかのように見えてくる。更に、九五一番歌の「かがよふ珠」も、詠歌の場が大和ではないことを意識させる。巻六における「類」の導入には、歌に新たな意味合いを付与していく側面があるのではないか。

歌の見え方が変容してしまうのは、ひとつには、異なる機会に詠まれた可能性の高い歌と歌とが並べられるからだと考えられる。印南野行幸関連歌群もその一例である。金村と赤人の歌から構成される九三五―九四七番歌にも、以下のような左注が付されている。

右、作歌年月未詳也。但、以類故載于此次。

この「右」の範囲は諸説あるが、九三八番歌以下を指すものである。赤人の印南野歌群長歌九三八番歌は、「やすみしし吾が大王の神ながら高知らせる印南野の」と詠み出す等、行幸従駕の表現となっている。この歌群は、作者名しか記されていないが、行幸時の作として載せられていると見るのが自然だろう。それに対して、辛荷歌群九四二―九四五番歌、敏馬歌群九四六―九四七番歌にそのような表現は見えない。また、この時の行幸は、一〇月一〇日に印南野邑美頓宮に至り、一九日には帰途、難波宮へと到達しており、辛荷の島まで足をのばしたとは考えがたい。敏馬の場合は行幸の途上に位置するものの、目的の地への途上として詠まれていることが問題になる。印南野歌群第三反歌では帰路の思いが詠まれており、同じ機会の作として載せるのであれば、掲載の順序が逆ではなかったか。従って、敏馬歌群もまた「類」によって配置されていると考えられよう。それでは、これらの歌群を繋ぐ「類」とは何か。興味深い

は、印南野の地の価値を認め、それを讀える赤人の印南野歌群においても、第二反歌に「家ししのはゆ」と詠まれていることである。続く第三反歌でも「明日よりはした咲ましけむ家近附けば」とあり、帰途につくであろうことが想起されている。これは、行幸歌としてもあまり例を見ないだけでなく、印南野の地を讚美する長歌とも対照的である。

一方、この思慕の念は、辛荷歌群では、歌の中心に据えられている。長歌末尾は「客の日長み」と閉じられ、辛荷の島の間から大和の方を望んでも、決して見る事がかなわず、家との距離が開いていくことで、家への思いが募っていることが詠まれている。それは、「白雲も千重になり来ぬ」との表現にもあらわれている。第二反歌でも「倭へ上るま熊野の船」との対比によって、より大和から遠ざかり、思いが募るさまが提示される。

この思いは、ゆるやかにではあるが、敏馬歌群にも見て取れる。「間使ひも遣らずて吾は生けりともなし」とあり、家郷へ残してきた恋しい相手への思いとして表出されているからだ。従って、行幸歌としては特異な詠みぶりであった印南野歌群の思いが、左注に「類」として見出だされることがわかる。左注によって、家への思慕を軸に世界が拡張されている。

それでは、この「類」は金村歌群にも及ぶのか。金村歌群から望郷の思いを見出すことはかなわず、「類」とはあくまで赤人歌群の問題のようである。金村歌群は、「海人娘子」への思慕を中心に構成されているからだ。淡路島の「海人娘子」の評判を聞きつけて、見に行きたいと思えども、船楫がなく、そこ

まで到達できない、ただ、その一事ゆえに、思いがますます募っていく、その思いを中心に展開している。

しかし、赤人の敏馬歌群も、反歌で「須磨の海人の塩焼き衣」が穢れることを詠んでいる。「一日も君を忘れて念はむ」とあることから、女の立場、即ち、自らを海人に擬えているのだろう。長歌でも、深海松を採ったり、なのりを刈るという、海人の行為が詠まれる。金村歌群とは、海人と逢瀬がかなわない恋を詠んでいる点が共通しており、「類」が認められていたと考えられよう。敏馬歌群は、赤人・金村双方の印南野歌群と「類」によって繋ぎあわせられる、かすがいのようなものとしても機能していることになる。

その結果、この時の行幸では、土地への讚美と家郷への思慕の両方の思いが存在したことになる。それは矛盾するようなものではなく、そのどちらの感情にも容易に針が振れるようなものだったのだろう。興味深いのは、金村歌群と敏馬歌群に、ことばから歌が紡ぎ出されていくようなあり方が見えることである。金村歌群では、淡路島と松帆の浦のアハ・マツの響きが、逢えないが故に高まる「海人娘子」への思いを導く。一方、敏馬歌群では、淡路島と敏馬がそれを担う。また、深海松となのりそによる連想も働いており、金村歌群よりも、名前からの連想による構成の面は強い。この連想についても、左注は「類」として捉えていたのだろう。同じ語を媒介にしながら、讚美と望郷のどちらにも心が揺り動かされるのであり、二つの感情は表裏をなしていることが窺える。

従って、この四歌群を繋ぎ止める「類」とは、決して一様で

はない。重要なのは、左注が「類」の内実を具体的に規定してないことであろう。それによって、基盤になった金村・赤人歌群から望郷や恋といった複数の要素を引き出し、それぞれを軸に多様な世界をあらわしている。

巻六冒頭に位置する吉野行幸歌群は、金村と千年の歌から構成される。その千年の歌には、以下のような左注が見える。「類」によって行幸の新たな側面を描き出すことは、巻の冒頭から既に提示されていることになる。

右、年月不<sup>レ</sup>審。但、以<sup>二</sup>歌類一載<sup>二</sup>於此次一焉。或本云、養老七年五月幸<sup>二</sup>于芳野離宮一之時作。

従来は、「或本」の記述から、金村の作と同じ行幸時の作だとされてきた。しかし、左注によると、「歌類」に従って載せられたことになる。「年月不審」ともいい、本来の配列基準を鮮明に打ち立てながら、それとは異なる歌の共通性を重視するのである。

この時の「類」を考える上で重要なのは、千年の反歌九一四番歌の「滝の上の三船の山」という詠み始めが、金村の長歌九〇七番歌冒頭と一致することである。千年の歌は、恋情や望郷を詠むものだとして、金村との差異が強調されてきた。そのなかで、「滝の上の三船の山は畏けど思ひ忘るる時も日も無し」と詠む九一四番歌は、三船の山は恐れ多いものの、恋しい相手のことは忘れないことを詠んでいると理解されている。

確かに、「或本」反歌は恋情が中心化されている。それは、長歌でひとり見ることが惜しまれた「清き川原」を中心に展開されるからだろう。しかし、三船の山を取りあげる本伝反歌に、

人への恋情を読み取れるのか。そもそも、この歌で三船の山に對する畏怖を抱くのは、長歌で「み芳野の真木立つ山ゆ見降ろせば」と詠まれているように、山の高さを意識する状況下に身を置いていることに由来しよう。これまでは意識されることのなかった恐ろしさが芽生えると同時に、「清き川原」を目にした感慨を覚えていくのだろうか。

例えば三三二四番歌では「君の御門を天の如仰ぎて見つ畏けど思ひ憑みて」とあり、「皇子の命」を恐れ多いけれども、恃んでいたことを詠んでいる。末尾の「玉だすき懸けて憑はな恐くありとも」も含め、人麻呂の高市皇子挽歌の影響下にあり、畏怖と思慕という相反する思いが共存することを詠む。他に、一三三一番歌や九二〇番歌のような例もあり、千年の歌が逆接句になっているのは、三船の山への畏怖と同時に、止むことなく繰り返される思慕の念があることをあらわすと考えられるのではないか。

長歌では、人伝てに耳にすることしかなかった時期に、吉野への思いが募っていたことが詠まれている。そのような状態で初めて吉野を目にするからこそ、畏怖と思慕が絡みあった感慨を覚えるのだろうか。そして、直接的にその地のありようを捉え、「音」に聞く以上の地であったとその素晴らしさを認めている。三船の山を端緒に吉野の地の素晴らしさが広がっていく点は、金村歌と共通しており、それこそが「類」ではないかと考えられる。

金村の長歌は「滝の上の御舟の山にみづ枝さししに生ひたるとがの樹のいや継ぎ継ぎに万代にかくし知らさむみ芳野の蜻

鈴の宮」と詠まれ、吉野に宮を定めた天武から皇統が連綿と続いていく様が、「とがの木」によってあらわされている。その「とがの木」が生えている場所こそが、三船の山なのである。従って、三船の山とは、天武に始まるこの世の統治の伝統を体現している山だということになろう。

つまり、山への畏怖を述べるに過ぎない千年歌は、左注によって、畏怖の理由を、山そのものの荘厳さから、皇統の連続へと読みかえられたのではないか。左注は、吉野の地そのものもがつ荘厳さを、皇統の連続との関連で捉えなおすことで、連綿と続いていく皇統の新たな幕開けとして聖武朝を前面に押し出そうとするのだらう。

しかし、観念化された金村歌に対して、千年歌では、むしろ山そのものの雰囲気を体感することに意義がある。吉野の地そのものの雰囲気への感慨は、その景の共有をも望ませる。「類」を軸に据えるからこそ、そこから派生する思いが多様なものとして提示されるのである。歌を年次別に並べ、歴史を紡ぐという姿勢を鮮明にしながら、その一方で、「類」という異なる基準を持ち込むのは、「類」によって示される世界の広がり強調することなのだろう。

#### 四、おわりに

巻六における「類」の導入とは、本来ならば相互に関連することのない歌と歌とを結びつけ、行幸を多面的に描き出すことであった。その特異な結びつきは、作歌時期を不明だと述べた上で、「類」に言及することで果たされている。

作歌時期を不明だと述べることは、既に巻一に前例がある。三九番歌左注は「未詳 知何月従 駕作歌」と述べる。巻一では、『日本書紀』等を用いて題詞を検証しながら、正確な歴史を紡ぐとする。複数の御代の史を並べることで歴史を紡ぐというやり方が、正確性を要求するのだらう。正確な時期の特定に至らなかったことが、三九番歌左注ではこのように述べられているのである。こうした左注は、一つの〈型〉をなしている。巻六も、基本的にはその〈型〉を踏襲していると考えていいだろう。しかし、巻六の場合は、併せて「類」を導入する。ここでは、作歌時期が不明だと述べることで、本来的には関係のない歌と歌とを結びつける資格を与えることになっている。左注の〈型〉が変容することで、巻六独自の世界がつくりだされるのだ。

これは、一代史を紡ぐ巻六の問題と関わろう。巻六では、聖武朝一代を、それも、紡ぐ側にとって非常に身近な御代のこととして語るために、正確性よりも、その多様な面をあらわすことが重要になったのではないか。

そもそも「類」とは、歌の要素を取り出し、その要素によって歌と歌とを関連づけ、位相の違いをも超えて結びつけるものである。歌意を超えて歌を繋ぎあわせるからこそ、広がりが生まれる。それ故、同じ作者の歌や問答の歌を併せて載せることで曖昧になってしまった歌意を具体的に示そうとする左注も存在する。しかし、その一方で、挽歌の例のように、積極的に「類」を推し進めることで、新たな「挽歌」の世界を創造する場合もある。

しかし、どちらの場合も、本来の配列基準と、それに違反するような基準の両方が示されていることは見逃せない。ある観点からだけでは決して見えてこない、それを超えたところに広がるものを汲みとることにこそ、「類」に言及する左注の意義があると考えられるのである。

注(1) 「以類」に関しては、城崎陽子「万葉集の編纂―「以類」

と記すこと―」(『万葉集の編纂と享受の研究』おうふう、二〇〇四年五月)の指摘がある。しかし、「類」の内実や、導入することで目指されているものには、検討すべき課題として残されているだろう。

(2) 例えば三十一番歌、九三四番歌も同様の形式をとる。題詞に作者名しか記さない場合、直前に置かれた歌群と同じ機会に作られたことを示す(吉井巖「萬葉集卷六について」『萬葉集研究』第一〇集、一九八一年一月)。